幼兒教育

第二十卷第十號

大正九年十月十五日發行

目次

託兒所の保姆……藤井利譽
内務省が兒童衛生展覽會を開催する所以……久住謹輔
秋季皇靈祭の朝の二時間……平島權藏
玩具選擇上の標準……藤五代策
日記の中より……日彰幼稚園
幼稚園の改造意見……久門嘉祐
雜報
少年音樂家(十八)……岡田美津

日本幼稚園協會

會告

○會費御拂ひ込みの節は御名前は初め御入會の時の御名前と御同一になし下され度く、例之ば初め幼稚園名にて御入會、後、個人の御名前にて會費御拂込み等のことなき樣必ず願上候整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候

○會費未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに亙り候場合は乍遺憾雜誌發送を停止可致候間左樣御含み置願候

○會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願上候

○萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

本誌定價

一册（郵税共）金貳拾五錢　六册　前金壹圓五拾錢
十二册　前金　參　圓　（郵券代用壹割增）

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。（振替口座東京一七二六六番）

大正九年十月十二日印刷
大正九年十月十五日發行

東京市日本橋區岩附町一番地
編輯兼發行者　小高艷

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者　柴山則常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　杏林舍

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
發行所　日本幼稚園協會

十月常會

一、時　日　大正九年十月二十二日（金曜日）午後二時半

一、會　場　東京女子高等師範學校附屬幼稚園

一、講　演

題　未　定

內務省書記官　湯澤三千男君

會員以外の方々も多數皆樣御誘ひ合せ御來會を歡迎致します。

大正九年十月

日本幼稚園協會

コドモ童話

幼年雜誌 良友

本誌は最も平易な、最も教育的な子供繪雜誌たるべく苦心して居ります

本誌はコドモの兄樣姉樣に當り、小學生の讀物として最も適當な雜誌です

近來子供雜誌や繪本類が非常に多くなつて、既に二三十種に達してゐる。

世の父兄諸氏は、この多くの同種中、はたして何れを子弟の爲に選ばるゝであらうか。

單に玩具と見做して、その選擇を慢然兒童の取捨に一任して置いてよいであらうか。

發行所 東京市小石川區林町五十七番地 コドモ社 電話 小石川 六一二九 八一二一

幼兒教育　第二十卷第十號　大正九年十月十五日發行

託兒所の保姆

東京女高師附屬幼稚園主事　藤井利譽

託兒所の保姆は新しき特別な素養がなければならぬか。託兒所の爲すべき新しき仕事とは何か。

託兒所の保姆は年齢に於て異れる、二歳又は三歳から六歳までの幼兒、又は生れて程立たぬ嬰兒の敎育を受持つ。託兒所は主に細民部落、下級勞働者住宅區域等に設けらるゝから、保姆の任務として、疾病、不潔、榮養不良、又は不良の習慣を有する幼兒を取扱ふことが多くなる。然るに現在の幼稚園の保姆は大抵は是等の事情を取扱つて居る。託兒所の保姆は同情的、母性的本能を有し、幼兒の身體的・精神的發達につき注意深く研究を爲し、幼兒の健康不健康を察知する修練を積まねばならぬ。といはるゝことも聞いて居る。又保育者としては敎育の理解、文學自然研究音樂圖畫及び手技等の研究をなさねばならぬといふこともあるが、しかし是等は皆幼稚園の保姆に對しても要望せられることであつて、幼稚園の保姆なり、小學校の敎員の常に實行して居るところである。若し斯の如きことを以て託兒所の保姆に對する要求とするならば別に新しいことも何もない。從來の保姆でも又小學校の敎員でも、託兒所の保姆は務まるものと思ふ。然るに動もすると、從來の保姆や敎員は組又は級の管理の術を學んで居るが、幼兒の個人的發達を進むる方法については甚だ迂遠なるものがある。室內に多數の幼兒を押込めて之を靜粛に管理する方法を知るも、屋外の新鮮なる空氣中に幼兒の潑溂たる活動を爲す指導を忘れてゐるのもある。惡習慣は三ツ子の中より養成せらるゝことを

閑却して日々惡しき習慣を形成する機會を造りつゝあることに氣の付かぬものも鮮くない。斯の如き傳統的な形成に嵌まつた、若くは怠業的氣分の湛ふ幼兒敎育の方法を以て滿足するならば、將來の保姆の素養としては大いに新しきものが加はつて來ねばならぬ。

今日進んだ保姆であつて、從來の學級敎授式の保育方法をとるのはない、彼等は十人に對しては十色の方法を以て個性を導きつゝある、故に一人の保姆の擔當する幼兒數は段々其の數を減じて居る。英國のミス、マクミランの幼稚園では六人乃至七人の幼兒を分團として盛んに屋外に於て保育をして、幼兒も保姆も自由に活動して居る。これと同樣の方法を以て託兒所は其の受持兒數を最少限度に少くして屋外の保育を奬勵し幼兒個性の活動を助けねばならぬ。從つて保姆の任務は變化の多い忙はしいものとなる。特に終日幼兒の在園するところにあつては幼兒の睡眠衣食の世話內外の空氣に對する注意等幼兒發育上一切の衞生上の知識を有し其取扱に熟練せねばならぬ。

幼兒が善良な習慣を造くる爲めには非常な忍耐を要する。保姆は幼き手がエプロンのボタンを外づす間之を待ち且つ注意せねばならぬ。木鍬が取り運ばれ又は畫本の取り片付の出來るまで見て居らねばならぬ。茶碗や箸が備へられて辨當の用意をするのを看視せねばならぬ。又手洗、齒磨、髮梳等淸潔の感若くは淸潔を好む習慣を養ふことに注意せねばならぬ。其の他、御話の仕方や遊戲の指導等よく幼兒の自然的發展を促すべき方法を盡さねばならぬ。實に保姆の目や耳は幼兒の一擧一動を洞察して誤たぬ程銳敏明確であるを要する。さてかやうな修練はどうして得られやうか。餘程困難なことである。普通の練習所や學校などでは恐らく出來ぬであらう。併し此難問に對する答は一つである。卽ち、「託兒所に於ける幼兒の中から」といひたい。併し日常の經驗は貴いが斷片的たるを免れない、宜しく目的と原則と關聯せしめて之を統制する必要がある。實驗は原理によつて光明が與へられる。

身體衞生上の原理につきては勿論醫學の研究に待ねばならぬ。併し純粹の學理の研究を單獨にしたところで效果がない、幼兒の身體の研究は臨牀的に若くは實驗的に學ぶを得策とす。例へば幼兒の體重、

食物衣服を初めとして、呼吸睡眠等に關して、幼兒の衞生上の研究を實驗的に學ぶのである。英國には、中央幼兒養護所(Infant welfare Centre)がある。此處は託兒所保姆の練習として適當の場所である。更に英國では衞生視察員と同伴して家庭生活の狀況を調査して居る。

幼兒研究、言語練習、體育、其の他園藝音樂手工等は師範學校其の他の練習所に於て敎授を受くることを得るが、是等の研究は實際託兒所に働くものゝ實際的の要求に合せなくてはならぬ。託兒所保姆の研究會を設け、心理學者、醫者等を顧問として、實際につき幼兒敎育の比較研究を爲すも可である。遊戯、音樂等の堪能者を聘して託兒所保育に適切なる講習を開く樣にもしたいのである。更に進んでは、幼兒生活と其の環境とを知る必要があるから、社會學的研究もなければならぬ。併しこれは社會學其の物を學べといふではない、寧ろ生きた社會其の物の實相を能く知るやうにしたいと思ふ。英國の師範學校で社會研究といふ科を置いて、細民部落の研究に從事せしめてるのを見たことがある、それは社會學の序說を少し計り授け、他は部落の實地に臨みて調査を爲し研究をするのである。幼兒敎育につきてもかくありたいとおもふ。幼兒の住する世界を熟知せずして適切な保育を施すことの出來ぬことは言を待たない。

一體、幼兒敎育者に對する社會の要求は餘りに低い「高等子守」位にしか思ふて居らぬ保姆たり得るものは女學校の卒業者なら誰れでもなれる。准敎員でも保姆になれる。併し近代敎育の進步につれ、幼兒保育の方法は日に月に進んで來た。其の研究も亦漸く深くなつて居る。保姆の資格や修養が今日の如く低くては到底現代敎育の趨勢に伴ふことが出來ないのみならず、幼兒保育の效果が擧がるものではない特に今後漸く盛んならむとする兒童保護問題に伴へる託兒所に働かんとするものゝ如きは、從來の保育法の錯誤を破つて玆に新しき賢明なる敎育的方法を建設して行かねばならぬ。幼兒及び其の周圍の狀況の劣惡なるところに於ては、尙更人格の崇高な、識見のある、伎倆の勝れた保姆を要する。近時英國あたりで保姆の養成に非常に力を盡して居る、保姆は少くとも他の學校卽ち小學校の敎員と同等の修練を積ましめねばならぬといふ聲を高くして居る。我が

國の現狀は保姆の養成は師範學校の片手間に行はるるものが、最上である。多くは急場の間に合せに過ぎぬ。託兒所に働く保姆の養成の如きは、今後如何にすべきであらうか、これを單に一二の慈善家に任せて置いて可なるか、託兒所の施設の擴張に伴ひ、此の問題は必ず起らねばならぬと思ふ。少くとも中央に模範的養成の機關を設け地方に其の範を示すと同時に首腦人材の供給を圖らねばならぬと思ふ。

序に一言して置くことは託兒所の使命である。今、英國師範學校協會の報告を摘錄して說明に代へよう。託兒所の使命は三つの見地から述べることが出來る、(一)幼兒の身體的健康を增進せねばならぬ。これが爲めには新鮮な空氣、適當な睡眠、自由の運動を爲すに足る場所を有すること。健康、榮養、清潔に對する注意を充分にし、又其の正しき習慣を形成すること。而して生活は露天生活たらしめ、室內生活たらしめぬこと。沐湯所を設くること。食物供給の設備と衞生設備を爲すこと。(二)心的發達を爲さしめむが爲には遊具を備へ、遊戲の機會を作り、庭園等に於て幼兒に相應せる經驗をなさしむること。正式の敎授は託兒所には不適當である。(三)託兒所は小なるを可とし、且つ家庭と近距離にあるがよい。

○あさがほ

M　子

夏休みになる時に、幼稚園から一鉢のあさがほを貰らつてかへつた。これは幼兒と一緒に種子をまいて毎日水をやり可愛がつて育てたもので幼兒も皆一鉢づゝかゝへてかへつた。先生もおうちへもつていらつしやるのと催促されたので、どんな色の花が咲くか休み後に御話し合ふ事を約して別れた其鉢である。この鉢は、お母さまのものと定め、外に苗から仕立たのや後から買ひ足した二三の鉢とならべて、花の咲くのを待つた。赤い花のは姉のあさがほ、白いのは弟のもの、紫は父、扨ては祖母のと、姉弟は、てんでに持主を定め、毎朝花を見るのをたのしみに起き出るのである。幸に鉢が少いので毎朝十以下の花が長い間一朝もかゝさず咲いた。早く花を見ようと起る二人は、今日は九つ、今朝は八つと大喜びの中にも姉は六歲で、來春學齡に達する事とて數の觀念もやゝたしかに、數へる事に興味を持ち、「けさは五つ咲いた、そうでせうおばあさんのが二つに私のが三つだから」、「今日は坊やのが四つに母さんのが三つで七つ咲いた」、「あら二つしぼんだ、あと五つ開いてる」、「あの白いのが一番大きくて、私の赤が一番小さい」などゝ、數と量との觀念が自然に明かになつた、(三三五頁へ續く)

內務省が兒童衞生展覽會を開催する所以

衞生局展覽會事務主任　久住謹輔談

「我國の乳兒の死亡數は近く年々三十萬に上りまして約二分間に一人なくなるやうな次第で」と、兒童衞生展覽會の趣旨に就て申上げやうとすると、「君、そんなことは心配ではないぢやないか毎年我が人口は七十萬人宛も殖えてるではないか」と仰せられた方が中學校の校長さん方の中に御座いましたが、果してソウ無造作に此人口問題を語り去ることが出來ませうか。我生產率は明治四十四年が近年の最高率を示し、人口千に付きまして三十四人生れる計算に當つて居りますが、其後は漸次低下の傾向を示して大正四年には三十三人大正六年には三十二人四分に減つて居ります。更に人口問題上生產と表裏の關係に在る死亡率を見ますと、大正二年には人口千人に付て十九人四分死亡する割合でありますが、其後漸次增加して、大正六年には二十一人四分に昇つて參りました。卽ち本邦に於ては、生產步合は今や既に低下の步調を取つて居るに拘はりませず、死亡步合は最近に於て著しく上昇して、然かも其高位を持續して居るやうな有樣であります。此結果たるや、人口自然增殖率の低下を伴ひまして、大正六年には此の率が人口千に付一〇・九三に當りまして、大正五年より〇・二四低く、近き既往の最高率を示しました、明治四十四年及び大正二年に較べると、實に三・〇〇の低下で御座います。斯く人口問題の數に於ても、既に樂觀を許さない兆候を現はして參りましたが、更に其の質を調べますと、眞に憂慮に堪へないものがあります。之は如何なることかと申しまするに、暫時我が一歲未滿の乳兒死亡率を御覽下さい。是は、明治四十一年には生產千に付一五八でありましたものが、大正五年には一七〇、大正六年には一七三に上つて居ります。試に之を英國に較べますと、千九百八年(明治四十一年)には英國の乳兒死亡率は生產千に

付一二〇でありましたが、千九百十七年(大正六年)には九六に漸減して居ります。爾餘の文明國の乳兒死亡率も皆減少して參りまして我國のやうに高率の國はありませぬ。此の幼者の死亡率の減少は延いて文明諸國に於ける總死亡率の低下を伴ひまして、其の局是等の國は生産率は減少して居るに拘はりませず、人口の自然增殖率の歩合は決して惡化しては居りません。尙御參考の爲め左に大都市に於ける生産千に對する乳兒死亡率を申上げませう。

市名	乳兒死亡率	調査年度
東京市	一七一・六	(大正五年)
大阪市	二三三・〇	同
京都市	二〇八・一	同
名古屋市	一八三・四	同
横濱市	一九三・三	同
神戸市	一九五・三	同
倫敦	一〇七・九	一九一八年(大正七年)
紐育	九一・七	同
ワシントン	一一〇・〇	一九一六年(大正五年)
ベルン(瑞西)	八一・〇	同
バンクバー	六一・七	同
アムステルダム	六四・九	一九一四年(大正三年)
マンチェタスー	一〇七・〇	一九一八年(大正七年)

右の何の市と較べましても、不幸にして日本の六大都市が一番不良であり、六大都市の中では大阪市が一番不良である。卽ち大阪は世界の一の乳兒死亡市であることを御承認下さるでせう。次に我妊産婦の死亡數は明治四十一年から大正六年迄十ヶ年の平均が六千三百十六人に當りまして、之れ亦歐米に比すると三割位高率でありまするし、死産數も年々十四五萬で之れ亦歐洲諸國中の最高率を示す所の伊太利に較べましても、尙、約二倍以上であります。其他幼若、靑年者、壯年者の我が死亡率を觀まするに、亦列國に比し二倍乃至三倍の多數を占めて居ります。又壯丁檢査の成績に徵しましても漸次身長が增加して體重が減少し所謂釣鐘の幽靈のやうな人が殖える傾向が御座います。又傳染病中最も怖ろしい結核病患者はどうかと申しまするに、明治三十二年以降五ヶ年間の平均が人口一萬に付男一六・二九女一七・五一計一六・八九でありましたのが、明治四十二年以降五ヶ年間の平均に依りますと男二〇・三七女二三・四四計二一・八九卽ち五・〇〇の劇增でありま

して然も生殖時代の女子に於て其數が著るしく多いのを御注意を願ひたい。殊に寄生蟲の害毒は到る所の農村に浸潤して我衞生局が直接調査致しました全國五ヶ村の農村の平均に徵しましても、何種かの寄生蟲卵を有する者が百人に付八十六人八分の多數を占めて居ります。以上を綜合して考へまする時は乳兒死亡率の多い所は殘存者の體格も亦虛弱たるを免れない明證でありまして、然かも是が我が帝國の事實たるを知るに至つては、眞に邦家の爲容易ならざる現象と信じます。でありますから乳兒の保健延いて妊產婦の衞生は國民保健問題の中堅であり、民族衞生問題の先驅であると存じます。

かゝるが故に歐米に置きましては、兒童保健妊產婦養護のことは二十世紀の重大問題となつて參りました矢先に、偶〻今次の大戰に逢ひ列國共人口問題上由々しき打擊を蒙りましたので、更に此の兒童及妊產婦問題が戰時より戰後に亙つて油然として高潮せらるゝ次第であります。英國の衞生省設置と謂ひ米國の赤坊週間、子供の年の運動と謂ひ、各國の巡回保健婦の育兒相談所、妊產婦相談所等の增置と謂ひ兒童及び妊產婦保護法の公布と謂ひ、皆是が發現に外ならないのであります。近く米國より到達した報告に因りますと、昨年の五月八日より四日間華盛頓に於て兒童の福利大會が開催されまして、兒童福利の最低標準に就いて有效なる協議がありましたが、其の主要なる議題は左の三種であります。

一、兒童の勞働と敎育

二、母親及兒童の保健に關する公共的保護

三、特殊的養護を要する兒童

更に右の議題に付協議決定せられた一・二の事項を申上げますと、

「兒童職業相談所」を設けて就學義務を了へて職業に從事しやうとする者の相談相手となつて之に適當なる職業を紹介したり、一定の所に傭はれた後も之が監督をしてやること。

「最低就業年齡」は何れの職業でも滿十六以上と定める、但し十四歲以上十六歲未滿の者は學校の休業中農業や家事上の務に從ふことが出來る。採鑛業に從事する者の年齡は滿十八歲を下ることを許さない。通信配達業に從事する者は女子に在りては滿二十一歲以上、之が特別配達業に從事する者は男女を問はず滿二十一歲を下つてはいけない。尙危險の虞ある

業務、非衞生的の業務、又は身體上若くは德義心の發達上支障を生ずる虞ある業務には全然未成年者を使用することは出來ない。

「最低、就學義務年齡」七歲以上十六歲未滿の兒童は毎年尠くも九ヶ月以上就學しなければならない。十六歲以上十八歲未滿の未成年者で第八學年は終へたが未だ高等科を修了しないで官廳の發する就業證書を受領して職業に從事する者は、毎週八時間以上晝間課業ある學校に通學しなければならない。又十六歲以上十八歲未滿の者で八學年を修了しない者、若は、之を修了した者でも、一定の職業に從事しない者は、全日課業ある通常の學校に就學する義務がある。精神上の低格者なる爲通常の敎育を受くることの出來ない者は、特殊の職業敎育を受けなければならない。又、休業中の保健增進に資する敎育所を設置して漏れなく兒童を之に收容しなければならない。

「妊產婦相談所」を設けて私費で診療的助產の手當等を受けることの出來ない妊產婦の相談相手となつて、無料に此種の周到なる世話をしてやること。「育兒相談所」を各地に置いて私費で診療看護等の便を得ることの叶はない乳兒及幼兒に無料にて此種の惠を與ふること。又、育兒相談所に公設保健婦を置き學齡前の幼兒ある者の家庭を歷訪させて育兒上の相談相手になること。

「學齡兒童」の爲には學校の保健的管理とか設備、敎授衞生、救急處置等を遺憾なからしめ、學校醫の外學校看護婦を常置して親しく各兒童の保健衞生上の世話を掌理せしむること。

「育兒助成金制度」家庭生活は文化の至高最美の產物であるが是を完ふするには一定の生活費が必要である。殊に父親なく一定の財產、收入なき家庭に在りては母親として其子女の養育を完ふせん爲に充分の育兒助成金を附與することが緊要缺くべからざるものである。

其他種々の注目すべき決議事項がありますが、之が實行如何と申しますに是等の多くは既に諸則にて實施する所でありまして、唯、少くとも此の限度に於ては兒童の福利を企圖しなければならないといふ、實行的意味に於ける兒童福利の最低標準であります。より以上此の問題の爲に優秀なる施設を講じ有效なる政策を採ることは、素より望む所でありまして、又、實際之に著手して居る所が尠なくありませ

ん。兒童の保健及福利問題に關する內外の趨勢は、正に右のやうな次第で御座います。而して我國にては、從來比較的此の問題が閑却されて來た傾向がありますが、又、それ丈今日では焦眉の急を訴ふることが甚しいものがあります。之が解決は素より尋常一樣の事業でなく、其の方法亦多樣でありませうが、差當り妊產婦の攝生とか、育兒法等に就いて、一般のお方の諒解と努力とに依ることが手取早い、且、有效なる本問題の一大解法と存じます。是、今回內務省が此の展覽會を開催するに至つた所以で御座います。此の擧を機運として、何卒一般の御家庭に於かれては、可愛いお子樣方の爲に、一層合理的にして衞生的の育兒方法を試みて戴き、學校や幼稚園、保育所等でも、一入兒童の保健養護に留意していたゞき、公共團體や公益法人婦人會篤志者等の側からは、盛に產院とか育兒相談所、保育所、良乳供給所の如き公益的施設を營むなり、兒童週間の如き運動を起して頂くなりして、共に俱に此の重要喫緊の事業の爲に、提携協力を煩し以て心身共に健全なる次代の國民を造り、之を小にしては一家の福祉、之を大にしては國家の進展に資したいと切望する次第で御座います。

滿三歲に足らぬ弟まで負けぬ氣で、二つ三つ五つと、兎に角數へる氣になつて居る。數へて見たいといふ欲望は、數觀念の基礎である。比べて見るといふのが量の基礎である。間違はずに二十三十と多くを數へ得るといふよりも、幼稚園時代では數へたい比べたいといふ欲求が强くなつて貰ひたい。甲より乙が大きい、乙より丙が多いといふ觀念が出てくれば、數の基礎觀念が出來たと見てよい。數の觀念は幼稚園時代には未だ發達しないといふ人もあるけれども、基礎觀念はもう出來ればならぬ、幼稚園の生活中にもそういふ機會を捕へる事は數へきれぬほど澤山あるけれども、今年は偶然にも子供によつてよい實見をさせられた。日を經るに從つて十以下の加減は誤りないやうになつた。之を敎へやうとして無意味な日數を取扱つて努力するならば可なり骨の折れる事であるのに、自分から興味をもち、進んですることだけに進步が早い、それ以來盛んに數へるやうになつた。同時に色に對しても正確な知識を得た事をよろこんだ。幼稚園で每年一の組の幼兒に種子をまかせる事については其利益の大なるを信じて居つたが數に對してこれほど有效だとは思はなかつた。これによつて一層自信を高め自分も又興味を持つ事が出來た。たゞあまり花の數が多過ぎて此年齡の幼兒の力に適さなかつたり少なすぎて興がなかつたりしてはさまで有效でないと思ふ。幼兒のもつてかへるのはただ一鉢であるが、家庭の一寸した注意によつて善用されるのである。この花が休みでない時に咲くのであつたらどんなに面白い事であらう。

秋季皇靈祭の朝の二時間

東京女高師助教授　平島權藏

五歳になる男の小供を連れて目黒植物園から裏の野原に出で、五反田に參る邊の途中の問答の一節を骨子にして少し許り考を申上げて見たいと思ます。

市内電車を離れ、橋を渡つて左に曲ると、小供は突然に。

兒「御父さんアゲハが來ました、花も無いのにナゼ此木に止まるのですか」。

私「此木はカラタチといふので、アゲハは是に卵を產むのです。卵が來年の春に孵化つて、小さな蟲になつた時に、鳥などに捕られない樣に、コンナ枝や刺のイッパイ在る所に、卵を產んで置くのです。そして、小さな蟲が出ると、此の木の葉を食べて大きくなつて、ソレカラ又蝶々になるのです。花に來る時は、花の中の蜜を吸ふたり、露を吸ふのでカラタチには卵を產みに來るのです。

（參考。カラタチの中にはオキクムシといふアゲハの蛹を見出す事は容易で有ります。是を持歸つて成る可く內部の見得る器の中に入れて置くと後に蝶々が出ます。

又此頃は毛蟲や芋蟲靑蟲などの大きいのが居ります、これを其蟲が止まつて居た植物の葉で育てると、日ならずして蛹を作ります。是が來年蝶々になつて出るのを實驗するのは、小供の爲に面白い事と思ます）。

兒「御父さん螢の樣な蝶々が煉瓦に止まつて居ます。取りませうか？」。

私「御捕りなさい」。

都合よく捕れました。

私「此蝶々は螢の樣だから「ホタルテフ」といふのです。持つて歸つて仕舞つて置きませう」。

其から、小さな野原に出ました。其所にタケニグサの少しく紅葉しかけたのが有りました。

兒「此モミヂ變なのですヂー」。
私「是は紅葉では有りません。タケニグサといふので折ると黄色い汁が出ます。汁は毒です」。
（タケニグサといふのには何の興味も出ないのでしたが名稱を聞かれた時に教へるのは必要と思ひます。）
兒「ギン（ギンヤンマの雄）が澤山居ますヂ。ムギワラが居ます。シホカラハ居ませんヂ」。
私「シホカラつてドンナのですか」。
兒「ムギワラの樣なので白いのです」。
私「あれは、ムギワラが雌でシホカラが雄なんですよ」。
兒「トンボの卵は何所に產みますか。？（アゲハのから思つたらしい）。
私「トンボは、水の中に卵を產むのです。ギンやチャン（ギンヤンマの雌小供は是をチャンと呼ぶ）が夕方になると澤山に飛んで居るのは、小さな蟲をとつて食べるので、蚊もとつて食べる。それから、トンボの小供はヤゴといふので、是は水の中の小さな蟲を捕つて食べる。ボーフラといふ蚊の小供を取つて食べる。トンボは私達を刺すいやな蚊や蚊の小供を捕つて食べてくれるのだから、ムヤミニ殺してはいけませんよ」。
（參考。水中のヤゴ（又、タイコムシといふトンボ類の幼蟲）を捕つて來て、ボウフラを餌にして飼つて置くと、後にはトンボが出て來ます。ヤゴは保護色で泥色をして居ますから、能く注意せぬと捕れませぬ。ヤゴが水中から這ひ出して、背中が裂けてトンボになつて飛んで行くまでの時間は、數時間かゝりますが、是などを觀て居ますと、若いトンボが初て空中に飛び立つ時の心は、如何んなものかと誰にでも考へさせずには置くまいと思ひます。此樣な事は想像はダメで、實際の場合に立つて初めて起る感想で有ります。如何に考へるかは、其人々の心の儘で、種々の相違が有りませうが、小供などには決して惡い感化は與へまいと思ます。注意深い一種の勇氣を奮ひ起させる事が有りはせぬかと思はれます。今或る人の實際にサナヘトンボの蛹卽ちヤゴ（此樣な運動する蛹を運動蛹と申して蠶の繭の中に潛む蛹などゝ區別します。）が脫皮するのを觀察した報告によつて、其時間だけを左に揭げて置きます。頃は四月下旬。
一、午前九時五十四分……充分生熟したヤゴ水中

より出づ。

二、同　十時五十一分……ヤゴの胸部背面裂初む。

三、同　十時五十二分……頭部の複眼及び胸部現はる。

四、同　十時五十五分……頭を擡げて胸部を殼からゆり出す。

五、同　十時五十八分……前脚から順々に三對共に出る。

六、同　十一時……胸部と腹の前部が拔け出す。

七、同　十一時七分……體全部が殼から出た。

是から次第に腹部が伸び、翅も成長して行き、翅は透明になり、體色は變り、全體に光澤を帶びて來て數回羽ばたきの後先づ、二間程飛んで草の葉に止り、二三分の後に、藪を越え垣を越え家を越えて空中遙かに飛んで行つた。

と有ります、此樣な事を小供に觀せてやれば、如何んなに喜ぶで有りませうか。又如何に偉大なる敎訓を敎ふるで有りませうか。長い〳〵冬の間を水の中の暗い所で過して居たのが、今此嬉しい空中飛行を初め、自由に思ふ所に飛んで行かれるといふ事に就ては、强い〳〵感化を與へ得る事と思はれます)。

其れから目黑植物園に參りまして、猿の雄雌と一匹の小供との動作を飽かず眺めて、容易に動きません。其他、白孔雀や小鳥などに就ても、種々の質問も出ましたが、餘り長くなりますから今回は是で御免を蒙ります。唯此園內で、植物の名稱を聞きましたが左の數種で、悉く敎へて遣りました。

ハス、宅に二三株のサトイモが在ります。其を思出したがハスを見て是はオイモですねと、聞きました。其から一通の說明をしてやりました。後に宅のサトイモをハスイモだと申したそうで有ります。

ハナショウブ、花は無くて實が有りました。

ハギ、赤と白と有つて眞盛りでした。

フヨウ、是も赤白二種有りました。

フトキ、之は實が出來て居りました。

シヨン、咲き初めで有りました。

其から歸途には馬蹄を打つて居るのを見て、痛くないかと聞きましたので、吾々の爪を切る事を比較し

て話ましたら喜んで聞きました。

一度歸宅しましたが、午後に兄や姉が同じ方面に散歩に行くのに、又ついて行きたいと申ますので、疲れて居はせぬかと申ても、決して疲れては居ないと申て、とうとうついて行きました。餘程面白かつたと見えます。

玩具選擇上の標準

東京女高師講師　藤五代策

普通日用品の商店であると、景氣不景氣によつて賣行きに多大の影響を及ぼすものでありますが、唯玩具のみは子供の必需品として無ければならぬ品物ですから、平和の時には平和向の玩具が流行して、戰爭の時には戰爭向きの玩具が賣行くので、玩具に凶年ないとはよく謂つたものであります殊に東京市中の玩具小賣店は五百餘軒もありまして、巧妙な形狀と、美麗な彩色とになれる玩具で、店内一面が裝飾されてありますから、實に市中の花とまで呼ばはれて居ります。そこで玩具を渇望する子供、愛兒を育ぐくむ母親達は、絶えず此の玩具店を訪づれて居るのでございます。

偖て態々玩具を需めやうと云ふことになりますと、あれもよい、是れも宜しからふと、氣が轉々に移り替つて、容易に決定し兼ねるのでございますから茲には玩具の選び方の大體の標準をお話したいと思ひます此の標準に付ては、學者間に色々調査したものもあります。或人は年齡によりて選擇し、又子供の心理狀態を主として選ぶがよいとも申されますが、私は左の如き意見を有つて居ります。

(1) 乳兒用の玩具。おしやぶり、乳首、ゴム人形、ガラ〳〵、風車、起上小法師等。

(2) 模倣用の玩具。一掃除玩具、まゝ事玩具、化粧用玩具、春駒、兵隊用玩具。

(3) 練習用玩具。竹笛、ハーモニカ、鐵琴、劍玉、獨樂、輪投げ、お手玉、竹がへし等。

(4) 愛情用玩具。雛、張子の犬、猫、猿、小鳥類、養鶏玩具、牧場玩具、一般人形等。
(5) 工夫用玩具。板排、積木、繪合せ、數學遊び等。
(6) 運動用玩具。砂遊び玩具、繩飛び、ブランコ、輪廻し、紙鳶、羽子板等。
(7) 製作玩具、折紙、豆細工、粘土細工、厚紙細工、竹細工、木細工等。
(8) 不思議玩具。祕密箱、活動畫、ピックリ函等。

以上の外玉ころがし、道中雙六等の勝負事玩具もありますが、此等は可成與へぬ方がよいのです。

日記の中より

京都日彰幼稚園

子供の病氣の中にて最も恐ろしいのは疫痢である。二三歳位から九歳位迄での子供に多い。至れり盡せりの家庭の子供がこの病に冒されるものが多いやうに思はれる。此の病に罹つて死んだものゝ體質を考へて見ると、何れも共通の點が多いやうである。卽ち筋肉のつき具合皮膚の色つや、其の活動ぶりなどよく似て居る。

疫痢には原因に素因と誘因とあつて素因は體質である。卽ち胸腺淋巴性の者が多く罹り易い。誘因には食物からや腹部の冷却暑熱のために侵されるのだそうである。胸腺は腹部にありて、大小の差が甚しい。大きのは五〇瓦、小さいのは五瓦位である。この大きいのがいけないのである。それで割合に腹部が膨脹してゐる。肥滿して居るやうでも皮膚の色艶が宜しくない。そして餘り快活でないやうに思ふ。無論黴菌の侵入せなければ罹病はせぬが、えて良家の子女は常に大切に仕過ぎて食物や暑寒運動の鍛練がないから、こうした子供はすべての病に於て抵抗力がないからである。

家庭訪問して此れに罹つたのを聞くと、何時も同じ言葉である。「原因としては、食物に就いて何もそうい

ふ系統はないのであるが、不思議でなりません。あれほど用心に用心をさして居りますのに」。この言葉を聞くのが常である。

吾々は多くの大切な子女をあづかつて居る以上は、各兒の體質をよく觀察して、良く知り、そしてそれ相應の豫防もし注意もして上げて、其の季節に至りて親御達の悲しみを少なくして上げ度いとどんなに思ふであらう。

休暇中には例年二三人は此病におかされるのであるが、十中八九はたすからない。此の夏休にも二人死んだのはやつぱり疫痢であつた。一人は男の子で、一人は女の子であつたが、考へて見ると體質なり性質なり幾分似て居る點があつた。

其の中の女の子は滿四年六ケ月になる村上せつ子さんと云ふ可愛らしい利口ものであつた。たつた一人子の天にも地にもかへ難いそれは〳〵大事大切にして育つて來たのであつた。實母は此の子の生れて間もなく病氣のために此世を去られたので其の妹さんが來られて慈愛深き母さんとしていつくしんで來られたのである。お父さんは別に職業としてはなく、積む財産で浮世の波風も御存じなく、氣樂な御家柄らであつて、文士である。大方は此の愛子のために日も夜も守り役をして居られた。毎朝幼稚園へせつ子さんを送りて來られては、暫く遊戯する有樣を見られほく〳〵よろこんで居られた。女中は家の御用がすむとお父さんと更代すべく出て來るのであつたが、女中にまかすのさへ後見返りがちにおうちへ歸られるのが例であつた。お家へ歸られては我子の歸宅を待ち兼ねて居らるゝのださうである。園外保育にもついて行かれる、豆ちぎりにも一所にゆかれて、子供と共に豆をちぎつて、子供と同化して居られたなど最も御自分の子供ばかりでなく子供と云ふものに餘程趣味を有つて居られたらしい。家庭の中心はすべて此の愛子であることは言をまたないのである。休暇中も避暑に行き度いけれども食物が變ると病氣になるからと云ふので、日歸りの所の他はつれ行かぬ位に注意を拂つてゐられたのである。

それに、これほど十二分の注意を拂つてゐるのに、いまわしい疫痢などに罹るとは何たる矛盾であらう。

命とも思ふいとし子に殘された御父君のお心の中を察しては實に御氣の毒此の上もないので何といつて御慰めしていゝか言葉はないのである。あゝ雨につけ風につけいとし子の永き旅路を思はれるでせう。日となく夜となく家内淋しく物足りなさを感じなさるでせう。今にも只今といつて幼稚園から歸宅するやうに思はれるでせう。行きかう子供等の中にももしやせつ子さんはあらぬかと求めらるゝでせう。數々のふりの小袖も今はあだなるかたみとなりました。見るものさわるもの皆思ひ出の種でないものはありませすまい。ほんとうに越し方の懷かしい追懷のすべてが一生の涙の種となりました。お父君に同情の餘り左の言葉を呈し度いと思ひます。

ぶりかへり見ますと夢のやうに短い月日ですが、四ヶ年と申せば隨分長うございます。其の四ヶ年間大なる慰藉を與へられ最も幸福をお感じなされた事を感謝なさいませ。世には子寶なく一生親子の恩愛を知らずにゆく人もあります。賢い子は命短かいと申します。神は人の世に置く事を惜しまれてみもとに呼びよせられたので御座いませう。靈魂といふものがあるならば必ずせつ子さまはあなたの身につきそつて居らるゝでせう。なげき悲しまれることはせつ子さんの美しいたましいを傷つけはしませんでせうか。どうぞ〳〵いぢらしいせつ子さんのたましいをいだいて居らるゝあなたの御體をば大切にして下さいませ。

會報

○日本幼稚園協會常會

別項豫告の通り、本會は、來る**十月二十二日（金曜日）午後二時半**から、東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て、十月常會を開きます、當日は、内務省から、湯澤書記官が衞生局長代理として御出で下され特に私共幼兒教育關係者のために御講演下さる筈です。何卒、幼稚園に直接關係の方々は勿論のこと、愛兒の御教育に腐心さるゝ家庭の方々の、多數御誘ひ合せ御出席下さることをお勸め致します。

幼稚園の改造意見

東洋幼稚園牛込分園長　久門嘉祐

改造は、もう世界のあらゆる方面に響き渡つてゐるのである、勿論幼兒教育としても此響きに醒めざるを得ないのである。さて、どう此響に應ずるかといふことに對しては自分は十數年來の實驗研究に照して「翫物の教育」といふ改造を提供するのである。

一、「翫物教育」の特色

(1)經費は已に活きた遣ひ方であるから無駄がなく、隨つて效能が直に表はれる。

(2)翫物を充分豐富に供給しても經費は却つて各園で從來よりも必ず輕減する。

(3)翫物の教育によれば幼兒の遊びが自然で圓滿で愉快である隨つて神經質的消極的に監督する事情が段々に殆んどなくなる、それに人が相手になり人が遊ばせるので翫物に代るのであるから人手が少くて濟むことになる。

(4)幼兒は自分等の眞の生活を得るのであるから非常に滿足なるのみならず、それを監督してゐる先生保姆が自然に幼兒の發達を日々手に取る如く見ることが出來て非常に愉快である。此點は確かに教育者に對する最大の慰安である、始めて天職といふ味をしめることが出來る。

(5)子供は翫物に對するときは眞である翫物は實に子供の心の鏡であるが故に其舊性觀察には非常に輕便で又決して誤らないのである。

(6)翫物の教育は已に子供の眞を握つて居るので、あるから實に萬世不朽である、世が如何に變遷しても、又如何なる新思想が輸入しても決して驚く必要はないのである。

(7)翫物の教育は決して面倒なものでも、又決してむつかしいものでもない、寧誰れにでも頗る容易に出來る唯人によつて多少上手下手がある位のものである。

(8)翫物の教育は保姆先生としての働きが啻に幼稚園に奉職中だけ役に立つといふやうなことでなく他日或は現在子の親として日々我子の幸福を増進するの德を得るのである。

以上は唯翫物教育の結果として表面的な效能であるが又內面的には概ね左の如き偉なる效果を收め得るのである。

改造は急務であると言つて決して慌てるには及ぶまい、各幼稚園の都合で一づゝ出來易い事から確實に改造して行けばよいのである、而して先づ過渡期として多額の經費を要することや又理想上のこと等少數幼稚園にのみ可能といふやうな事は暫く措き、どの幼稚園にも必ず贊成があり直に實行も出來而かも效果の絕大と信ずる改造意見について少しく論述せんとす。

一、內面的改造各項

一、無信仰より國教的安心へ

西洋では兎も角教育の根柢を信仰に取つてゐる、其頭で日本の教育を見て直に奇異に感じ、子供の趣性如何といふことについて頗る疑惑を抱いてゐるらしい。而しそれは誠に無理のないことであると思ふ日本の學校教育にはどう見ても無信仰狀態であるからである。

而して日本には遠く肇國の始め、皇祖皇宗に依つて萬世不朽の國教的安心を授けられてゐるのである卽ち明治大帝に依つて教育勅語として下し賜はつた御聖勅がそれである。苟も教育者たるものは此大御心に精神を安心し日々子供に接心して自然に子供の精神を養ひ健全なる思想、體軀を養成するといふことが我大日本の子供の教育の第一義である。こゝを深く心に刻み込んでゐなければならぬ。不知不識享樂巧利といふやうな外道に這入り込んでゐるやうなことがあつてはならぬ。

二、束縛より解放へ

日本の五十年昔の教育は精神的な束縛教育をしたのが今日では形式的束縛教育に置換へをしたのである。今日の狀態は決して自由教養でもデモクラシイでもない。殊に家庭教育に於ける今日の自由放任は、動もすれば家庭の無方針を暴露し子供を次第に惡化せしむるの患がある殊に目前の情愛の惡影響は又甚しいものがある。

又幼稚園に於ても、切に自由を唱へ、デモクラシイを鼓吹されて漸く小學校流の教授式を捨て自由に遊ばせるといふ傾向になつて來たのは誠に結構であるが。それだけでは唯形式上だけのことで眞の自由は得てないないのである。一歩進んで幼兒の體力能力道德に信賴して眞の自由解放的養育を施さねばならぬ。卽ち大人が神經的な小監督を捨て、子供の趨起を握る大監督の下に可成干涉を愼み、世話をせず、手口を出さず耳を掩ひ目を閉ぢて純然たる子供の天地で思ひ切つて活動をさせるだけの勇氣と設備が欲しいものである。而して保姆教師がこの大精神に基づいて監督をするならば、例令小學校流の教授式に依つたところで根本的自由發達は妨げられないで濟むのである。

三、幼兒教育より幼兒養育へ

大人は兎角子供を弱いもの無能なものとして待遇するのが常である、子供のすることにはどうも滿足が出來ないで批評したくなり教へたくなり口を出し手を出したくなるのであるが、それは子供にとつては、自分の境遇でない子供の生活でないことを大人から强いられる場合が決して少くない憾がある。

例へて見れば、丁度、子供が蟹を澤山取つて來て一生懸命石を積んで結構な巢を作つてそれに蟹を入れて置き、樂んで明朝行つて見ると何處からどう出たのか蟹はもう一疋もゐない。蟹の方では折角深切に巢を作つて呉れた好意には謝するのであらうが、どうもそれに安住することが出來ない、矢張自然に出來た石垣の穴や破瓦の下へ逃込んでしまふと同じ樣である。實に馬鹿〳〵しいことではないか。

幼稚園或は小學校に於ても兒童の自然の發達とか、自由活動とかセルフメードとか子供に眞の生活を與へよとか、教育するよりは先づ養育すべし、とかいふことは可なり古くから唱へられてゐることであるが、其言ふ人に然らばとなると一向纏まつた方法がない爲めに唯理想議論といふに止まつて著々實行の運に向つてゐないのである。それがそんなに、むづかしく考へないで又多額の經費をかけないで研究に多くの頭を遣はないで今日只今からでも其一歩は蹈み進むことが出來るのである。卽ち保姆教師が頭から教へる干涉し世話を燒くといふ態度を改めて、眞に子供の天賦の發達に信賴して頭を寧ろ空虛にし其保育法の如きは子供の日々の事實からヒント

を得る、大人が寧ろ子供に教はるといふ類になつて、子供の活動にぴつたりとくつついてゐて充分に便宜を謀り介助し誘導する、こうなつて欲しい。要するに大人がつくつた大人の頭で教へたのでは役に立たない、子供自身が自然に發達する樣に仕向けるのである。

四、情的興味から理智的興味へ

日本の文明は未だ過渡時代として漸く大人が西洋文明の眞似が出來る位で、まだ〳〵日本から新機軸を出すといふことには、なつてゐない位であるから、子供は又遙かに後方に取殘されてゐるのである。私の友人で日本居留の或西洋人の祕書役になつてゐる人の實話に曰く「西洋の子供は見上げたものだ」を振り出しに、「或日他所からお菓子折の到來があつた、其家の三人の子供は母にせがんでお菓子折を開いたが中味のお菓子はバラ〳〵とテーブルの上に振りうつして箱を三人で奪ひ合つて持つて行き、小半日もかゝつて汽車と船と飛行機を作つて喜んでゐるのであつた、それが、かなり精巧なもので子供が菓子折の廢物で作つたものとは思はれない程であつた」といふのである。

此場合に日本の子供なら中味のお菓子を引つつかみそうである。そして又それが日本の子供の興味の中心であるとも思へるのである。卽ち日本の子供の興味中心は總評的には情にある、延いては理智を暗まし能力を退化せしめ社會的公共的發達を押へんとしてゐるのである。此際是非共理智的興味中心に立替へたい、而して、それが決して不可能のことではないことは勿論のこと、非常な困難事といふ程でもないのである、只赤坊の時からの仕向方一つである。卽ち赤坊のときから、順次進步的に人がお守をする、人がお相手をするのを其時期〳〵に適當な翫物にお守をさせ相手をさせる、又、一方お乳やお菓子に枯息に機嫌を取るのを翫物で徹底的に遊ばせるといふ風にして自然に理智の發達に誘導するのである。幼稚園に於ても、翫物に對し充分に共鳴し融和せしむるのである。

五、虛僞から眞劍へ

日本の家庭は全部大人本位であるから子供の生活には不便不都合が多いのである、それでも家庭では敢て教育を標榜してゐるのでもないし、又餘り規律、形式的でもなく、それに子供には別に極まつた仕事

もなく、第一遠慮がない、こんなことから、子供は不完全ながらも子供の生活らしい生活をしてゐるのである、然るに幼稚園となると自然に堅くなり大人しくなつてどうも虚僞に流れ遊びの爲に遊ぶといふ狀態に陷り易いのである、昔福澤先生が子供に先生と言はせず福澤さんと言はせ子供の名を呼んで松太郎さん鶴子さんと言つたのも蓋し大に意義のあることであつたのである。幼稚園でも「さん」だけの敬語で滿足したい、そうして先生の心と幼兒の心との距離を縮めたい。そして心易い叔母さま、親類のお姉さまといふやうな親しみを持ち心から優しくする、其代り叱るべき場合には本氣で眞劍に叱るといふことにする。こうなれば遠慮と形式的威壓がとれて天眞爛漫に活動するやうになる。卽ち子供は子供の生活を生活するやうになる一方法である。

六、大人の相手から翫物の相手へ

如何なる結構な主張があつても、それに具體的方法が伴はなければ何の效もないのである、よし如何なる科學的の案があつても根本的に大人が相手になり、大人が敎へるといふことを更めて翫物が誘導する翫物が相手になるといふ頭にならなければ決して理想は實現されないのである。大人が敎へることを敎育であると考へたのは全く誤謬である。大人が子供に智慧を授け善道に導かふとしても、如何せん人の心は動である、常に動いて極りないものである。隨つて子供の敎育には不徹底に終るのが、寧ろ當然であるとも言へるのである。子供がそれを習ひ、それに模倣しやうとしても、お手本は已に動いてゐるのである、丁度赤坊の寫眞をとるときのやうである、なか〳〵ヒントを合はすことが出來ないやうである。而して翫物は卽ち靜物である、いつでも同じ智慧と同じ感化を子供に與へるのである、お人形はいつでも同じ顏をしてゐるといふ風に翫物それ〳〵の特長に依つて徹底的に子供を刺戟するのである。而して人ならば敎へた通り覺えよ、言つた通せよ、と迫るのであるが翫物は決して强ひない、卽ち獨樂にしても上手に廻はして呉れゝば上手に回はる、下手なら下手にまわる、獨樂には何等不平のないことは勿論子供も上手にまわつても下手にまわつても各々力に應じて滿足するのである、如斯翫物は各程度の子供に順應するのである、それが人が子供の發達を見たやうな間違は決してない、いつでも適中してゐ

るのである。要するに從來は先生保姆が子供に直接であつたのであるが、先生保姆卽ち大人が翫物の背後に位置して保育の大原動になるのである。

七、敎具から翫物へ

從來幼稚園に於ける翫物は、翫物的生命を失つて敎具になつてゐるのである、大人が敎へる頭で考案して翫物を又大人が敎へる頭で使用されて居るのである、遂に子供に親しみのない子供の生活とは沒交涉のものになつてしまつて居るのである、大人の頭でこんな物が敎育上有益であるなどといふ考へで出來た翫物は理屈は一應結構であるが、實際に子供が使つて見ると迚も消化の出來ないやうなものが多く自然に子供は手から離すのである、子供が翫物に依つて餘念なく遊ぶ其敎育上の效果は、敢て心理學者の說明を待たないのである、翫物で遊ぶそれが子供の生活であるといふことも誰人も承知して居ることである、而して子供に眞の生活を與へ其自然の發達に資せんとする翫物は如何して得んとするか、それは子供の實際の活動の上から必然的に要求されることを基礎として其遊に便宜を與へ、其活動を有意義ならしめん目的で工夫するのである。又其作り出された翫物をどういふ風に子供に渡し、どう監督するか、それは唯綺麗に整頓して陳列して置き自由勝手に用ひしめるのである。それは先生が見てゐて充分必要と認めた場合にのみ手を出して手傳つてあげる、敎へて上げる、毀はれた所具合の惡い所を修繕してあげる、全く保姆先生は介助者であり技師である、それから尙一つ大切なことは、子供は何か手に物を持たないと賴りないものである。會〻ぼんやり突つ立つて居るもの寫眞や繪本を目の前で見せても、それでは決して承知しない必ず手に持つて見なければ見たやうな氣がしない、これは大人も同じである卽ち遊んでゐないものは決して手に物を持たない寧ろ手を引つ込めてゐるものであるが、これ等には臨機に何か物を持たせることである、如何なるはにかむ子でも、又如何なる引つ込み思案の子供でも何か物を手に持つたら、もうそれから遊んでくるものである。又子供の發達程度に依つては唯手の賴りに物さへ持ちさへすればよい、何といふことはない、こういふ場合に何をするといふ目的はないのであるから車とか鐵砲とかいふものよりは唯の棒でも木片でもよいのであり。寧ろ無意義なものゝ方が子供が働き

出すに自由である便宜であるのである、こういふ場合もあることを知つてゐて翫物を取換へてあげるといふことも實に大切であり。又世間では應用といふことのはきちがひをしてゐるのでないかと思はれることがある。例へば子供は木銃を諸種に應用して使ふ、或時は木銃で擔へ筒、捧げ筒、立擊と戰爭ごつこに使はれる、又或時は帶に插して刀にし又或時は跛足の丁字杖に又或時は三挺も七挺も竝べて橋に又或時はなぐり合の棒に又或時は土掘りに、子供の應用的能力を認めるのはよいが、この狀態を喜ぶのは全く見當違である、これでは子供の頭をめちや〳〵にするのである全く翫物が非常に足りない結果である、子供の生活を支へる翫物の貧弱からであるといふことに氣がつかねばならぬのである。

八、神經質的遊び場から樂天地へ

子供はもう遊ぶのが仕事であるから面白くても面白なくても翫物があつて、も、なくても遊ぶ快活にも柔弱にも遊ぶのであるが、幼稚園で一日中容姿も崩さず著物の前もちやんとし手も汚さず喧嘩もせず素直に先生の言ふことを聞いて充分規律を守り大人しく遊んでゐるやうでは、もう神經質傾向に陷つてゐるのである、これが習慣となつて固疾的に身體に影響もするのである、而して從來の幼稚園では多少とも其傾向は免れないのである、此際幼稚園は幼兒の樂天地といふことにしたい、家より面白い所にしたい、そして天眞爛漫に活動させ眞の發達を提供したい、それには唯翫物を豐富に與へるといふことで一切解決がつくと思ふのである。

九、義務形式に捕へるのからそれを味はせることへ

義務の修養と形式に馴れることは他日人となつて社會に活動する上に於て最も必要であるのであるから、幼い時から自然に苦なしに修養を積ませたいけれども從來のやり方は概ね人の敎育上の必要といふ自覺よりは寧ろ多數の子供の監督上の便の爲めに義務を强い或型に嵌め込んでしまつてゐるやうに思はれる、かうなると幼兒は義務形式にいぢけ込んでしまふのである、かうでなく何とか上手にして義務形式を味はせ漸次積んで人とならせたい、それには頭から義務であるぞ、形式は絕對に守れよでなく、幼兒の頭にも理解を有たせ義務形式に活かすべきである、一例を揭ぐれば。

(1) 幼稚園を病氣でもないのに缺席するのは惜し

い、それにどうも相濟まぬといふやうな心になつて厭と思つたときでも押して出席する、出席して見ると氣持もよく又決して厭どころでない面白い、來てよかつた。

(2)自分で使つた翫物は片附けて置くと自分としても心地がよい、それに幼稚園が亂雜でなく又後で使ふ人も好都合である。

(3)幼さい子弱い子をかばつてあげるのは強い子だ善い子だ氣に入るやうにしてあげると心から感謝する。

(4)規律を守るのは我々が習ふにも遊ぶにも便宜である、大勢が皆思ひ〳〵勝手なことをしてゐては亂雜で喧騒で各々互に邪魔になるのである。

以上のやうな理解から毎日出席をする翫物を片附ける、幼い子を可愛がるのは我々の義務である。是等義務を滿足に果たし規律を守ることに依つて我々は人たる修養を積むことが出來るのであるとこういふ自覺を有ちたい。

十、形式美から努力美へ

幼稚園で金にあかして庭園を作り室内を裝飾するといふのは先づ考へものである、それも貧兒專門の幼稚園なら、せめて幼稚園を綺麗に飾りて自然に美感を養ふのもよいが、中流以上の家庭の幼兒を收容する幼稚園としては寧ろ不必要であると思ふ、子供は綺麗なお座敷や年中植木屋のは入るお庭では遊ぶことは出來ないものである、無雜作なところでなければ遠慮で遊べるものでない、現今中流以上の家庭でも子供を大事にする家には子供の部屋を設けてある實に遠慮のない部屋である、それにお座敷のお庭までも木は片隅に寄せるし石は拂はれて實に大人の生活には殺風景になつてゐるのである、幼稚園は卽ち子供の部屋であるから無雜作で遠慮のない方がよいのではあるまいか。我々は其美よりは努力美といふことを大に發揮したい、卽ち庭はもう廣い駈け遊ぶ庭にして間がな隙がな掃除をして箒目を入れて置く、子供が散かした玩具は片附けて置く、それに玩物運動具にしても店で買つた體裁のよい弱いのよりは、出來れば先生が汗の油で作つた不細工な頑丈なものがよい、障子の破れは直ちに繕ふといふやうに、こんなやうに先生の努力に依つて園内及翫物を修理整頓して幼兒に自然に美として強い深い感化を與へ美の本體を握らせたい。

十一、幼稚園的の遊びから實際的遊びへ

幼稚園が現在の狀態では概ね幼兒に二重生活を強いて居る傾向がある、家での遊びは眞劍の進びで自分等の生活の爲に遊んでゐるのであるが、幼稚園では幼稚園の遊びの爲めに遊んでゐる、家での遊びと幼稚園での遊びとは全く異ふのである、この狀態であるから、幼稚園の教育を家庭で崩す場合もあり又家庭の教育を幼稚園で毀はすといふ場合もあることは勿論である。恰も花の苗と雜草と一しよに生へてゐるやうなものであり。如何に花の方に肥料を施しても肝腎の花が吸はないで雜草に吸ひ取られて雜草にはびこられてしまつて花の苗はだん〳〵にさびて行くのと同じである。卽ち遊びの不徹底からである。保育學から割り出された保育法よりは子供の實生活から割出す保育法を用ひ大人が强いる遊びより子供の實際の遊びを出來るだけ多く幼稚園に採用して家庭幼稚園共通の遊びに遊ばせたい。

十二、眞似から創造へ

世界の日本が何時までも眞似の國で滿足して居るべきでない、それには幼い時から眞似の遊び卽ち人の眞似大人の眞似をして遊ぶ今日の狀態から漸次指導して創造的に生活せしむるやうにせねばならぬ、現在の玩具は概ね大人の生活の眞似で既製のものか或は唯組み立てる位なものである、こんな玩物で何時までも遊ばして置けば折角の創造能力も退化してしまふのであるから、幼いときから色々工夫して自然に創造能力の發達を誘導すべきである、全體子供は何か自分で作るといふときの努力は大人が感心する位なものである。そして出來上つたときの樂しみは又格別である、こんな嬉しいことは自分で物を作つたとき以外には到底得らないであらふと思ふ程喜ぶものである。

又幼稚園の教課とも思ふてゐる手技といふことでも、又自由の遊戯に於ても、又玩物で遊ぶ時に於ても可成大人が指圖をし干渉をしたりせずに可成幼兒の各々が出來る丈で滿足してあげることである。

十三、智識の教育から人の教育へ

幼稚園は元來人の教育であるべきである。然るに幼稚園が段々に形式的に流れる結果として智識發育に傾向くのであるが、もう心ある家庭では幼稚園は教へて困る今から教へられては頭を痛め神經質に陷るといふ議論の下に幼稚園を否定する人さへ出來か

かつてゐる狀態である、若し幼稚園が智識教育に偏したら勿論幼兒を毒するものである。幸にして世間の杞憂に屬することであるから、それ等の人には簡短に說明さへすればよいのである、但し同じことで遊ばしても、少しのやり方で世間が憂ふる智識教育にもなり、又人の教育といふことにもなるのである一例を擧ぐれば(フレーベル氏積木)。

(1)大人が積方を教へて皆に其通りにさせやうとすれば無論智識の教育であるが、そう純然たる教授式でなくとも幼兒の積方の上手とか下手とかいふことに先生の頭がこだわつてゐるやうでは智識教育である。

(2)大人が積方を形式的に教へないことは勿論のことである。幼兒の形式的成績如何にも頓著せず唯自由に積んで遊ばせばよい、子供は唯面白く自分の力一ぱいに積んで遊べばよいのである。

唯左記の如く各自の個性の表現を鋭く觀察して置いて人格養育の好資料とせねばならぬ。

(1)どの程度に積めるか、(2)材料のこなし方。

(3)工夫力の程度、(4)材料の數量。

(5)好美性(美の觀念、細かい事をする性質)(6)創造の力。

(7)辛抱、忍耐、持續性、(8)好大性。

以上等個性的の長所短所。

十四、小學校の豫備的狀態から獨立必須の教育へ

全く家庭の考へ違ひから幼稚園が尠なからず迷惑を蒙つてゐる傾向がある、あの幼稚園へやつて置けば小學校へ無試驗無抽籤で入學が出來るからとか、或は幼稚園へやつて置けば小學校へ行つて萬事好都合である。團體的にも先生制度にも學校風にも友達に馴れ、それに唱歌も遊戯も手工も一通り出來るやうになるから學校が樂であるとか、こういふやうな實になさけない目的で幼稚園へ入れる家庭も決して少なくない狀態である。固より家庭が幼兒教育の趣味が低いのと未だ幼稚園を信賴する力が出來てゐないから起ることであるが、幼稚園としても何時が家庭が幼稚園を信ずる力が出來るであらうとなどと考へて安閑と待つて居るべきでない、國家教育の爲めに進んで幼兒教育の宣傳もし又機會を作つて家庭の誤解を反るやうに幼稚園が總掛りで內的活動にも外的交涉にも充分盡力すべきの秋である。

少年音樂家（六）

東京女高師教授　岡田美津

六、やくざ仕事

その日、晝飯後、民雄は御内儀さんが食卓を片付けて皿小鉢を洗ひ出するのを暫く默つて眺めて居た。どう〳〵。

「僕・手傳ひませうか」と民雄は悄然と訊ねた。

御内儀さんは、民雄の日に焦げた、ちいさな手を覺束なさうに瞥見て頭を振つた。

「いえ・不用・折角だけれど」と彼女は返事を取繕つた。

又五分程、民雄は無言でゐたが、こんどはもつと物思はしさうに訊ねた。

「あの一日かうやつて貴女のしてゐる事は役に立つ仕事なのですか」

御内儀さんはやゝ暫く吃驚した態で、小桶から出した濡手を、中ぶらりんに差上げて。

「え？それやそうとも！何て、下らない事を訊くのさ。どうしてそんな事を思ひついたの、え？」。

「新右衞門さんがそいつたのです。でもね、父さんが仰る「役に立つ仕事」つていふのと隨分違ふンですもの」

「ちがふ？」

「え、御皿を洗つたり、御飯の支度をしたり、後片付をしたりするのは、爲なくてはならないやくざ仕事なのだつて父さんが仰つてね・・・あなたのする半分も父さんはしませんでしたよ」

「やくざ仕事だつて、まあ！」

と言つて御内儀さんは、忌々しさうに皿洗を續けて

「御前の御父さんらしい言ひ草だね」

「さうなんです。父さんは始終そういふ風だつたんです」と民雄は愉快氣に頷いて・一寸してからまた訊ねた。

「あの、今日はちつとも散歩に出掛けないンですか」

「散歩に？何處？。」

「あの森だの野だのを抜けて・何處かへ」
「森の中を歩く、今？・たゞ歩きに。それどころか御前、私や他にする事があるンだよ」
「そう、惜しいンですね」と民雄の顔はさも氣の毒だといふ表情になつて。
「こんな好き御天氣だのに？明日は雨が降るかも知れませんよ」
「さうかも知れないよ」と御内儀さんは、ちよと眉を揚げて意味あり氣に民雄を瞥見て言ひ返した。
「降ろうと降るまいと私が散歩に出るには一向かかはりはないから」
「さうですか」と民雄はすご〳〵した「そんなら僕嬉しいな！僕も雨は平氣ですよ。父さんと僕とでいくども〳〵雨の中を歩きましたつけ。たゞその時はバイオリンを持つて出られないから、やつぱりよい御天氣の時の方が好きでしたけれど。でも、又雨降りの日にはあたりまへの日に無いものがありますね。木の葉の上で雨の雫が踊つたり、雨が風に追はれてさつと走つたりして。廣い原みたやうなところで、横にしぶく雨に觸るのはいゝ氣持ですね」

御内儀さんは眼をまるくした。それから、身慄をしてどうしていゝか分らないといふ風情で兩手をさし擧げた。
「まあ、此の子は」と力なく叫んで、臺所の用事に戻つた。
皿洗が濟むと掃除なので、御内儀さんは、めつたに日光にも空氣にも觸てない陰氣くさい客間の塵拂ひにと急いだ。無言で見守つてゐた民雄は、後から跟いていつた。客間に置き竝べてある物品——椅子長椅子、上面が大理石のテーブル、窗掛、クション、上被ひ、椅子蓋ひガラスの被さつてゐる蠟細工の花、壓し花、花束、隅の棚にごつちやに置いてある石塊貝殼、大小さまゞの花瓶など——の多いので彼は眼を見張つた。
御内儀さんは、入口で民雄が入りかねて居るのを見て。
「あ・入つてもいゝよ」と呼びかけて「たゞね物を觸つてはいけない。私が今塵を拂ふのだから」
「僕まだこの室を見た事がなかつた」と民雄は考へた。「さうだよ」と、御内儀さんは少し自慢の氣味で「此處は平常は使はないの、あすこの寢室も。こ

こは御客様の時ので牧師さんだのそれから御葬ひの時に・・」と言ひ差した御内儀さんは急いで民雄を見た。少年は何も聞いてゐないらしかつた。

「この家には、あなたと、新右衞門さんと、平藏さんとそれだけで、あとだれも居ないンですか」と民雄はまだ不思議さうに四邊を看廻しながら訊ねた。

「あ――いまは」と御内儀さんは咽ぶやうな息づかひをして壁に掛けてある少年の肖像畫を瞥見た。

「でも隨分澤山室がある――品物もね。父さんと僕のゐる家は二室あつて物ッて何もない位。僕の家は此家とそれや違つてゐました」。

「それやそうだろうさ」と言つて、御内儀さんは急ぎながらも大切さうに塵を拂ひ出した。彼女の聲には自慢の氣味が依然として入つて居た。

「さうですね。でもこの室はあんまり使はないのなら助かりますね」

「助かる・・」呆れて御内儀さんは、仕事の手を止めて目を見張つた。

「え、他に室が澤山あるから、そつちに居ればいゝから。こゝに居るには及ばないでせう」

「こゝに居るには及ばない！」と御内儀さんは叫んだ、ひた呆れに呆れる他には術もなくて。

「え、だけれど、こんなものをとつて置いて、毎日毎日綺麗に埃の溜らないやなにしなければいけないンですか。誰かにやるか捨てゝしまふわけにいかないンですか」

「捨てゝしまふ！」彼女は兩腕を夢中で擴げて、危險の逼つた一つ〳〵の大事な寶物を抱へこむでしまふ氣色だつた。

「御前は氣が狂つてゐるのぢやないか。こゝにあるものは貴重のものだよ。御金がかゝつてる――時も――勞力も、美しいものを見ても分らないのかへ」

「え、僕美しいものは好き」と民雄は無禮とも心付かずに、美しいといふ言語に力を込めてにこ〳〵して答へた。

「山にゐた時には美しいものを始終持つてゐたのです。日出に、日の入りに月に星、銀の湖に、それから帆かけてゆく雲の御船に・・・・」

併し御内儀さんは癪に障るといふ風をして、民雄を遮つて。

「もういゝよ・育ちが育ちだもの、ありさうな事だ、御前にはこんな物は分りはしないさ。捨てゝ

しまへとさ、ま、ほんとうに！」
といひ〳〵彼女はまた塵拂に掛つた。こんどは母親がむづがつてゐる子供を撫で慈しむやうな手觸りで品物に對つてゐた。
民雄は何だか落付かない居惡い感じがして、心配な眼付で御内儀さんを視てゐた。それから詫びるやうにかういつた。
「僕たゞかう思つたのですよ。もしあなたがねこゝにあるいろんなものを掃除しないですめば、もつと散歩にゆけるだらうと思つたの：今日だつてまた他の時だつて。暇がないンだつて仰つたでせう」
でも御内儀さんは唯頭を振つて歎息をして。
「もういゝよ〳〵。御前が惡氣で言つたのではないンだから。御前には分らないのがあたりまへさ」
民雄は御内儀さんが大事さうに品物をいぢくるのを熟と見入つて居たが、向きを變へて横手の縁へふら〳〵と出ていつた。やがて階段に腰を掛けて、衣嚢から二つの折りたゝんだ少さな紙片を取り出した。そして涙で眼を曇らせながら、今一度父さんの手紙を讀んだ。
「僕が悲しがると父さんも悲しくなるから、悲しがつてはいけないと父さんが仰つた」と暫くしてから彼は遠い〳〵山へ眼を放つて獨語した。「そして僕が彈きさへすれば、御山が僕のところへ來てくれるから、僕はほんとに山の家に居る事になるンだつて。バイオリンの中に僕の欲しいと思ふものの——大變欲——しいと思ふものがみんな入つて居るンだつて」
泣きたいのをこらへて、民雄は衣嚢に手紙を戻して、バイオリンに手を伸した。しばらくしてから、客間の椅子を掃除してゐた御内儀さんは、それを止めて戸口へ拔足で寄つて行つて息をこらして聽き入つた。稍、あつて彼女が立戻つた時にその眼は濡れて居た。
「あの子が彈くと、どうして私はうちの新助の事を考へ出すのだろう」
と布巾を取り上げながら吐息をついた。
夕食後、新右衞門夫婦は一日の骨休めに臺所の縁に出て居た。新右衞門は眼を塞いでゐた。彼の妻は納屋のぼんやりした輪廓だの街路だの前を通る一臺の荷馬車などを見据ゑてゐた。民雄は階段のところに坐つて、月が樹の項を放れてだん〳〵高く昇つて行くのを眺めて居た。やがて家へ、そつと入つてい

つてバイオリンを持つて出て來た。
美妙な音が一聲長くきこえて來た時、新右衞門は目を見開いて、口元を固く〆めて居住居を直した。すると御內儀さんは恐〳〵夫の腕に手を掛けて。
「何も言はずに置いて下さい」と小聲に賴んだ「ま、今夜だけは彈かせてやつて、――淋しいンだよ――可愛想に」
新右衞門は、澁面をして肩をすぼめ椅子に倚れてしまつた。
それからあとになつて、御內儀さん自身が、
「さ、民雄もう子供は寢るンですよ。二階の室まで一所に行つて上げるよ」
と言つて民雄を止めさせた。そして先へ立つて家へ入つて、蠟燭を點けてやつた。
民雄は臺所の上に當る二階の小室で獨りになつた。昨夜と同じにちいさな黃ばんだ白地の寢衣が椅子の背に掛けて置いてあつた、御內儀さんは、やつぱりその寢衣を弄りながら涙を拭いたのであつた。昨夜と同じに、大きな四ッ柱のある寢臺が、隅ッこに、いかめしく幅をとつて居た。併し、今夜は掛蒲團も敷布もまくッてさ御入りと云はぬばかりにしてあつた。御內儀さんは、民雄が前夜床の上に寢たのを知つて、大變氣を揉んだわけなのである。
民雄は壁に掛けてあるピン刺の甲蟲や蟻に態と背を向けて寢衣に著換へた。それから燈火を消す前に窗の許へいつて、膝をついて樹越しの月を眺めた。
民雄は心にひどく迷が出て來たのである。一體自分はどうなるのだろうと考へ初めた。自分のする美しい仕事が世の中にあるのだと父さんは仰つたが、その仕事といふのは何だろう。如何して探し出すのだろう。もし探し出せたら、それを如何いふ風にするのだろう。また一つには自分は何處で暮したらよいのか。今の家に居られるのか知らん。此處は自分の家庭では、勿論ないが、臺所の上には自分が寢てもいゝ小室があるし、親切な御內儀さんが居て時々悲しさうなあこがれるやうな眼で――時には此方まで悲しくなるやうな眼で、自分を見て微笑してくれる。自分は今では御內儀さんから離れたくない：父さんもいらつしやらないのだから。
それに金貨の事もあつた。民雄は、それにも亦當惑して居た。それをどう始末をしやう？自分には入用はない。親切な御內儀さんが食べるものを澤山呉

れるから、自分が店へ買ひに行くには及ばないし、一寸考へたところでは、何に使ふといふ目的もない。重くて身に著けて居るのは窮屈でしやうがない。そうかといつて、捨てるのも厭だし、持つて居るのを他に知られたくもない。一度、一枚出したら盗人だと言はれたのだもの、かう澤山持つて居るのを他が知つたら何といふだろう。

民雄は父が隱して置け入用があるまで隱して置けといつたのを今急に思ひ出した。やつと彼は安心した。どうして、今まで思ひ出さなかつたろう。隱すには好い場所がある——この室の爐の後部にある、ちいさな戸棚がいゝ。民雄は嬉しさうな歎息を一つして立ち上り、衣嚢から金貨を取り集め、戸棚の書物の後へ人の目に付かぬところへ押込めた。時計もそこへ隱した。たゞ、亡くなつた母様の小肖像だけは、そつと衣嚢に戻した。

農家で民雄が暮した第二回目の朝は、第一回目のとまづ同じやうであつたが、新右衞門が薪箱を一杯にしろと言つた時に、こんどこそは誘ひ顏の甲蟲をも蝶をも全く見ぬ振りをして、彼は、目前の仕事が終るまでせつせとした。

丁度晝食のすぐ前の事で、民雄が臺所にゐると、平藏が困りぬいた顏をしてやつて來た。

「御かみさん一寸、横手の戸口まで出て來てくんなさらねいか。女と子供とで何かはア困つてるらしいンだが。話がさつぱり通じねいンで。何を言つてるンだかおらにやトント分らねい。御前さんなら分るかしれねい」

「如何だかね・・」と言ひ掛けたが、御內儀さんはすぐその方を差して出て行つた。

玄關口のところに、可愛らしい物怖ぢしたやうな若い女が十歳ばかりの男の子を連れて立つて居た。御內儀さんの姿を見ると、身振り手眞似を混ぜてのべつに何か分らぬ事を話し立てた。

御內儀さんは逡巡して丁度納屋から庭を此方へやつて來た新右衞門に、助けを乞ふやうな眼を向けた。

「御前さん、この人は何の用があるンだか分らないかへ」

新な人が加はつたので、見知らぬ女は、も一層喋々と述べ立てた。新右衞門は身振りをしながら話す女を睨むやうに暫時見据ゑてゐたが。

「分らねへ。フランス語らしい・何か・欲しいンだな」

「そうとも——何だか知らねいが馬鹿に欲しいらしいンだ」と平藏はくど〳〵言つてゐた。

「空腹いのですか」と怖る〳〵御內儀が尋ねた。

「ちッと位、言語が通じねいのか」と新右衞門が問

ふた。言語の通じない異郷へ來た頼りない身を察してくれとばかりに、哀れな眼差しで、女は甲から乙を見渡したが、絶望したやうに頭を振つて彼方を向いたかと思ふと、急に嬉しさうな聲を擧げ、生き生きとした顏をしてくるりと向き直つた。

新右衞門と平藏は、見ると民雄が玄關口へ出て來て女に話しかけてゐるのであつた。民雄の言語も、女の言語同樣意味がとれなかつた。

二人の男はぢつと見てゐた。新右衞門は。

「貴樣そんなら此女の言ふのが分るのか」と鋭く民雄を遮つた。

「え、分るンです。あなた分らなかつたンですか。此人は路をまちがへてそれで：

併し、女は進み出て民雄の耳に滔々と一伍一什を話しこむのであつた。話が終つて、民雄は人々の顏を見ると、一同はまだあつけにとられてゐる風であつた。

「何の用だつて言ふのだ」とピリッとする調子で新右衞門が尋ねた。

「ラベルッていふ人の家を探してゐるンです。この方の旦那さんの兄弟なんです。この方は、今朝汽車で此處へ來たンです、旦那さんが何處かへ一寸寄つてゐるうちに、汽車に取り殘されたので、旦那さんは言語が出來るンですけれども、此方は出來ないンです。この國へ來てからまだ一週間にしかならないンで、佛蘭西から來たつて言ひます」

「いや、どうだい、え？」と平藏は感じ入つて。

「まるで字讀むやうにこの女のいふ事が分るンだな。隣村に佛蘭西人が居らあ。たしか二人居かつけ。その一人の事を言ふンぢやねいか」

「大方さうだろう」と新右衞門は同意しながらも、民雄の顏を不機嫌らしく見詰めて居た。新右衞門は女の事よりも、民雄の事を考へてゐるのが誰の目にもよく分つた。

「旦那あのな」と平藏は少し興奮して、「それあの用事で、おら一日二日の中に隣村に行く事になつて居たンだから、どうだろう今日晝すぎに出向いてこの女と子供とを送つていつてやつたら」

平藏は、女の方を向いて、腕を振つたり田舍訛りをゴタ混ぜにして、御前の行きたいといつたところへ、おれが連れていつてやるのだといふ事を解らせやうとした。女は、やつぱり解らないやうな顏をしてゐるので、民雄が早速仲へ入つて口早に二言三言いふと、女の顏には理解し得た悅びが顯はれて來た。

「御腹が空いてゐるのではないかッて尋ねて御らん」と、こんどは御內儀さんが言つてみた。

民雄は返事をきいてすこ〳〵しながら。

「いゝえ空いてゐませんて。子供は空いてゐるッていふンです」と通譯した。

「そんなら臺所へ來るやうにいつて御くれ」と御内儀さんは指圖しながら家の内へ入つていつた。
「きさまは佛蘭西人だな」と新右衞門は民雄にきいた。
「佛蘭西人？いえ、いえ」と民雄は得意氣に「僕はこの國の人なんです。父さんがそ言ひました。この國で生れたンだつて」
「どうして佛蘭西語がそんなに話せるンだ」
「だつて習つたンですもの」と言つても新右衞門に得心が行かぬのを悟つて。
「獨逸語や何かと同じやうに、本でもつて父さんに習ンたんです。あなただつてちいさい時に佛蘭西語を習つたンでせう」
「フム」と新右衞門は言つたきり返事はせずにのさ〳〵歩き去つた。
食事が濟むとぢきに、平藏は女と子供を馬車へ乘せて出て行つた。女は微笑を顏中に漂はせてそして、最後のなつかしさうな一瞥は、階段のとこに立つて手を振つてゐる民雄に與へていつた。
その午後、民雄は、バイオリンを持つて運動がてら家の背後の山の方へいつた。御内儀さんを誘つたところが、彼女は掃除も何もしてゐないのに斷つた。白い布に孔を明けて絲と針できたそこを縫ひ合せてゐる以外に、大切さうな用事もして居なかつたのに。民雄はそれから新右衞門を誘つた。ところがその斷りかたは、御内儀さんのよりも一層慳貪であつた。
「何だつて今役にも立たない運動におれがゆくものか——今にや限らねい——何時だつてよ」と彼は言つた。
民雄は思はずしりごみした。顏は微笑してゐたが。
「役に立たなくはありません。何でも私達をよい調子にしてくれるもなら無駄ではないつて、父さんが仰つたンです」
「よい調子にだと？」
「調子が變な時に父さんがなさるやうな顏を、あなたがしていらしつたら、僕そ言つたンです。氣分をよくするのには、運動に行くに越した事はないと父さんはいつもさう仰いましたよ。僕は——僕は今日少し調子が變なんです。あなたの顏付であなたもそうかと僕思つたので、散歩にあなたを誘つたのです」
「フム！いやもう——もう言ふな。生意氣云ふな。いゝか」
と如何にも怒つた氣に彼はあらぬ方を向いてしまつた。
民雄は解せないながら、重く沈んだ心になつて、唯獨り散歩に出かけた

日本幼稚園協會編纂

幼兒聽かせるお話

（十月中旬出版發行）

最新刊

■四六判上製全一冊
■優美なる新裝禎

■定價金四圓
■送料金拾貳錢

このお話の本は、お茶の水の幼稚園に於て數年に亙て園兒に聽かせたお話の中から、子供が三度も五度も繰返して聞きたがつた特別に面白いものを、更に百種選り拔いたものです。つまり無邪氣な眞實な子供によつて、嚴密な審査を經た譯ですから、幼稚園は申すに及ばず、一般の御家庭でも安心して、すぐ其儘讀んで御聞かせになる事が出來ます。其上倉橋先生の『幼兒敎育の手段としてのお話』と言ふ講話を附錄として添へてある事も、此本の特色です。編者は自信と勇氣とを以て、皆樣に御勸めし得ることを悅びます。

文學士　福島政雄氏著

實踐敎育上より見たる兒童の模倣

●定價金貳圓　●送料拾八錢

兒童の模倣は、敎育の實際に最も直接の效果ある研究事項として、著者が第一に選みたるもの也。深く人類の本能に研究の根柢を探り、心理、社會、倫理、敎育の各方面に於ける其開展の狀況を敍して、無趣極めて豐かに、更に敎育上の意義と應用とを精論して其適應の途の廣くして且自在なる所以を明にしたり。家庭・學校・社會各方面の敎化の原理を體得し、實踐せんとする人士の必讀の好著なり。行文流麗にして敍述懇篤を極む。

東京日本橋區大傳馬町二丁目
內田老鶴圃
電話浪花壹參參五番
振替東京壹貳壹四六番
圖書目錄送呈
（郵稅四錢）

●●●東京遊戯法大成會講師

水谷式大・眞島睦美共著

最新刊

音遊界福音の戯樂

小供の唱歌と遊戯

附錄 歌劇

教師用

姉妹篇

四六倍判横綴寫眞版入全一冊　定價金貳圓　郵税書留金十八錢

由來こどもの唱歌なり遊戯なりはかの無邪氣な小さい胸から流れ出る天籟の調に合はねばなりませぬ、水谷先生は音樂の素養深く且つ日常兒童に接して無意識裏に兒童の心に共鳴しておいでの方です、又眞島先生は現下兒童遊戯の權威者で其歌詞を表情し其歌曲と氣合を一にするに至つては實に天才であります、今此兩先生は平素懇親の間柄とて互に隔意なき研究を遂げられ此兩著を公にせられました幼稚園、小學校の受持先生方並に一般家庭に推奬致します。

兒童用

文部出檢中願定

こどもの唱歌（全三冊）

四六倍判横綴銅版全三冊、一・二・三各卷金四拾五錢　郵税各金四錢

東京日本橋角

大倉書店

振替東京二三八番

▲眞島睦美著▼尋常小學唱歌動作遊戯　洋裝菊判全二冊　前篇金壹圓七拾錢（第六版）後篇金貳圓（第五版）郵税各金十八錢

明治三十四年一月二十八日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）

幼兒教育　第二十卷第十號　大正九年十月十二日印刷　大正九年十月十五日發行　印刷所　合資會社　杏林舍